

# 幼児期・児童期におけるオノマトペの発達評価作成のための 試案検討

(中間報告)

白百合女子大学生涯発達研究教育センター 藤野 あすか

## Developmental Scale of Onomatopoeia for Preschoolers

Research and Education Center for Lifespan Development, Shirayuri University,

FUJINO, Asuka

### 要 約

オノマトペは子どもの言語獲得の基礎になるとされているが、その発達の研究は少なく、多くのカテゴリーにわたるオノマトペを用いて総合的に検討したものは見られない。年齢相応のオノマトペを明らかにし、それらのオノマトペを用いた発達評価を作成することで、臨床現場において簡便かつ子どもが抵抗なく楽しく取り組めるようなアセスメントを行うことが可能である。本研究では年少児から小学1年生にかけてのオノマトペ獲得の特徴や発達過程について、理解・表出の両側面から、先行研究を参考に独自のオノマトペ課題を作成して調査実験を行い、課題の正答率を算出することで、年齢相応と考えられるオノマトペを示した。本結果をもとに発達評価を作成するべく、今後はさらにデータを増やし妥当性を検討する必要がある。

**【キー・ワード】** オノマトペ, 幼児, 発達評価

### Abstract

Previous studies have shown that onomatopoeia is important for language acquisition of children. Though Japanese has much onomatopoeia, the developmental process of acquiring it isn't clear. This report shows the results of research on children (3-7 years) which asks them (1) to express onomatopoeia suitable for pictures and (2) to point to the pictures suitable for onomatopoeia. Onomatopoeia which percentage of correct answers is over 70% is thought to be acquired at the age. More data should be collected to create the developmental scale of onomatopoeia, which is easy to use and enables children to enjoy the verbal assessment.

**【Key words】** Onomatopoeia, Preschoolers, Assessment

## 問題と目的

音象徴性をもつために感覚的に理解が可能なオノマトペは、子どもの言語獲得の基礎になるとされている (Imai et al. 2008)。日本語はオノマトペの豊富な言語であるが、オノマトペについての発達的研究は少なく、多様な観点から総合的に検討したものは見られない。これらのことから筆者は多くのカテゴリーにわたるオノマトペ語を用いて、擬音語・擬態語・擬情語・程度の違いを表す語・音象徴語という幅広い観点から、年少児から小学 1 年生にかけてのオノマトペ獲得の特徴や発達過程について、理解・表出の両側面からの調査研究を進めてきた。

オノマトペについての先行研究の課題として、日本語はオノマトペが豊富であるゆえに、一般的にどの発達段階でどのオノマトペ語を理解・表出するようになるかという点まで詳細な検討がなされておらず、発達的な調査実験をする際に年齢相応の適切なオノマトペ語を選定するのが難しいという点がある。また、年齢相応のオノマトペを明らかにし、それらのオノマトペを用いた発達評価を作成することで、臨床現場においても既存の言語評価に比べて簡便かつ子どもが抵抗なく楽しく取り組めるようなアセスメントを行うことが可能であると考えられる。

これらのことから本研究においては、既存のデータに新たなデータを加えた上で再度分析を行い、各オノマトペ語やオノマトペのカテゴリーごとに各学年における正答率を算出し、年齢相応のオノマトペ語を明らかにすることで、発達的なオノマトペ研究のための基礎資料を提供し、またオノマトペを用いた発達評価作成のための試案を検討することを目的とする。

本中間報告では、既存データの正答率を算出・検討し、年少児・年中児・年長児・小学 1 年生それぞれに相応と考えられるオノマトペを示す。

## 方 法

### 1. オノマトペの選定

使用するオノマトペは、①単純な擬音語 16 語、②身近な動作を表す擬音語・擬態語 16 語、③感覚を表す擬音語・擬態語 16 語、④感情を表す擬音語・擬態語 16 語とし、日本語オノマトペ辞典 (小野, 2007) から選択したほか、先行研究である近藤・渡辺 (2010) を参考にした。各オノマトペを表すイラストを作成し、大学院生を対象とした事前調査でイラストの妥当性を確認した。

### 2. 調査期間・調査対象

調査期間は 2017 年 10 月から同年 12 月であった。

調査対象児は計 75 名 (年少児 19 名, 年中児 22 名, 年長児 28 名, 小学 1 年生 6 名) であった。また、発達の観点から成人データとの比較を行うため、女子大学生 16 名を対象に別途調査を実施した。

### 3. 調査方法

前述のイラストを用いたオノマトペ課題（理解課題・表出課題）に加え、一般的な語彙の理解力を統制するために PVT-R を実施した。調査は 1 対 1 の対面式で、PVT-R、表出課題、理解課題の順に行った。所要時間は合わせて 20～30 分であった。

表出課題は、イラストが 1 枚ずつ載った図版を提示し、イラストに適するオノマトペを表出するよう教示を行いながら、対象児の発話をすべて調査者が記録した。

理解課題は、イラストが複数載った図版を提示し、調査者が口頭で提示したオノマトペに対応するイラストを対象児に指さして選ばせ、記録した。

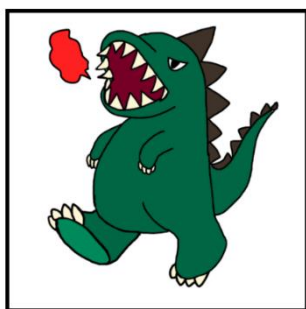


図 1 表出課題の図版の例  
(ドッシドッシ)

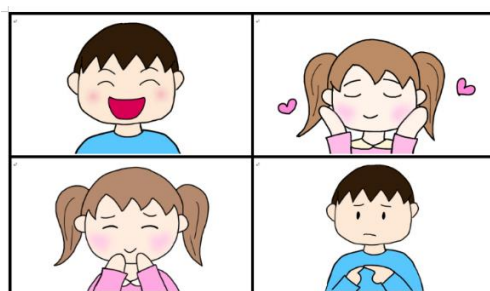


図 2 理解課題の図版の例  
(左上：ワハハ，左下：クスクス，  
右上：ウツトリ，右下：モジモジ)

### 4. 分析

正答を 1 点，誤答を 0 点として得点化を行った。それぞれのオノマトペについて，学年ごとに正答率を算出し，さらに以下の基準に従って年齢相応のオノマトペを絞り込んだ。

- a. 成人データで正答率が 90%未満のオノマトペは，幼児・児童の発達評価として不適切と考えられるため，除外する。
- b. 各学年で正答率が 70%以上のオノマトペを年齢相応とする。
- c. ある学年で正答率が 70%を超えても，それより上の学年で正答率が 70%を下回った場合には，発達評価として不適切と考えられるため，除外する。(例：年少児で正答率 50%，年中児で正答率 75%，年長児で正答率 65%であった場合)

## 結 果

分析の結果，年齢相応と考えられたオノマトペは以下の通りであった。



当性を確認する必要がある。

2. 発達アセスメントとしての観点から、年少児・年中児・年長児についてもデータを増やし、年齢相応の区分をより細かくすることが望ましい（半年刻みなど）。
3. 発達評価作成にあたり、対象児の年齢による開始問題や中止問題の設定など、具体的な実施法を検討する必要がある。

## 引用文献

Imai, M., S. Kita, M. Nagumo, and H. Okada. (2008). Sound Symbolism Facilitates Early Verb Learning. *Cognition* 109 (1) : pp.54-65.

近藤綾・渡辺大介.(2010). 幼児のオノマトペ知識に関する研究. 幼年教育研究年報 32, 29-36.

小野正弘（編）(2007). 擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典. 小学館.

